

スポーツ委員会のこれまでの審議内容とこれから

2019/12/9 渡辺

1. 審議の方向

- 1) スポーツ界を社会の縮図と考える
既存の社会的傾向や課題と関連させて検討
例) 科学を社会に開く際の問題 (閉じた系と開いた系の科学)
女性や LGBT、障がい者の問題
- 2) 社会から見てスポーツを変化させる
スポーツ界あるいはスポーツそのものの価値を社会に見合ったものへと変化させるためのエビデンスの明示とその論理を検討
例) 暴力の問題
- 3) スポーツから見て社会を変化させる
スポーツの利点を活かし、社会に好影響を与える
例) スポーツによって豊かになる人生

2. これまでの話題提供と予定

- 1) 来田委員 「健康・スポーツ科学分科会の活動・議論の概要」と「シンポジウム『博物館とのつながりがもたらすスポーツ文化の未来』に関する提言案」など
- 2) 山口副委員長 「スポーツを取り巻く環境―現状と課題―」
- 3) 田嶋委員 サッカー界を中心とした話題提供
- 4) スポーツ庁鈴木課長 スポーツ基本計画
- 5) 田原委員 ユネスコ「体育・身体活動・スポーツに関する国際憲章」(2015)
- 6) 酒折委員 スポーツイングランドの取組み
- 7) 鹿屋体育大学 前田明先生 スポーツデータ
- 8) 東北大学医学研究科 永富良一先生
指導者の暴言や暴力の要因 (連鎖を断ち切る必要性)、歯・口腔領域のケガや障害の原因は練習量と指導者の体罰や暴言
- 9) 桐蔭横浜大学 田中暢子先生 障がい者スポーツ
- 10) 日本障がい者スポーツ協会 陶山哲夫先生 障がい者スポーツ
- 11) 日本スポーツ協会 川原貴先生 最新のスポーツデータ
- 12) 東京大学先端科学技術研究センター 熊谷晋一郎先生
医学と工学を基本とした当事者研究が専門、車椅子の利用者
- 13) NTT コミュニケーション科学基礎研究所 柏野牧夫先生
野球・ソフトボールの投手・打者動作の同時計測と時間的構造解析

- 1 4) 東京大学 中澤公孝先生 義足アスリートにおける脳の機能的再編
 - 1 5) 一般社団法人コンピュータエンターテイメント協会 山地康之先生
e-sports の取組み&ゲーム依存症への取組み
 - 1 6) 神戸大学精神医学 曾良一郎先生 e スポーツを含めた依存症
 - 1 7) 東京大学 藤井知行先生 (会員) スポーツの性差について
-

- 1 8) 厚生労働省健康日本 21 プロジェクト、藤沢市コホート研究 (第二部小松浩子会員
から推薦) 地域でスポーツを取り入れて、個々人と地域の活性化の事例
- 1 9) 京都産業大学 森谷敏夫先生 健康寿命の最重要因子としての運動

3. これまでの審議で特筆すべき点

1) スポーツ界を社会の縮図と考える

- ① 金メダルを獲るという目標 (トップアスリート) とスポーツによる健全発達 (市民) をつなげる
- ② アスリート個人のキャリア構築能力の育成
(アスリートの主体性と指導との関係、発達段階における適切性 (受験との関係))
- ③ スポーツによって人生が豊かになる論理
- ④ 肉体面と精神面の両立
- ⑤ ルールの効用と限界
- ⑥ 多様性への配慮と価値の多様化
- ⑦ 変革の対象は若手と指導者
- ⑧ 科学的エビデンスの定義 (定量性が必要か)
- ⑨ スポーツ / 科学 / 平和の関係
- ⑩ 科学的エビデンスにおける統計的有意差の意味 (少数でも意味あるデータは活用)
- ⑪ 科学的エビデンスの根拠としての論文を尊重する必要性
- ⑫ データリテラシーの普及が必要
- ⑬ 正解は 1 つではないことの共有
- ⑭ 社会の約 1 割を占める障がい者のスポーツ不参加の原因の一部は、社会が障がいを作る問題
- ⑮ 精神障がい者に対する対応の遅れ (身体障がい者より 60 年遅れ)
- ⑯ 障がい当事者の主張は「適切なサポートで障がい者も能力を発揮できる社会を実現すべき」と「能力の有無を超えて尊厳ある人生を歩む権利がある」の 2 点
- ⑰ パラアスリートは、損傷後の脳や身体組織の回復可能性を示す最高のモデルである。障がい者は健常者が使わない脳を使っている、パワーリフティングや手を安定的に握る能力は健常者より下肢障がい者のほうが記録は高い

- ⑱ パラリンピックブレインから分かることとして、1) 身体のどこかが不自由になっても人間の脳や身体はそれを補い、大きく変わることができる、2) 私たちが今まで知らなかったほど大きな変化がある、3) どこかに障害があっても残された能力が健康な人以上になることすらあることが挙げられる。
- ⑲ 「弱音をはけない」ことがトラウマへの道へ
- ⑳ 同時に複数のキャリアを歩んでいるのが本来の人間の姿、早期からのデュアルキャリア、キャリアトランジションが重要
- 21 スポーツデータの継続的蓄積は一般人を含めた多くの人にとってメリット
- 22 評価を単純にわかりやすくすることが本質的評価でなくなる傾向、包括性のレベルを高めることと努力を正当に評価するシステムが必要
- 23 基礎研究者は単純な境界条件設定をするが、これを複雑な広い世界に応用する際の外挿はできない、よって実践の場である広い世界でデータを取る必要がある
- 24 マスコミの伝達が古い傾向にある、努力の結果の感動物語を作りたがるが、過度の練習でうつ病や体調不良になる場合もある。新しい感動を呼ぶための目線を変える必要がある
- 25 スポーツのサイエンスリテラシーは若いほど高い傾向にある（年配者は過去の経験を重視）
- 26 データが蓄積されることでコーチが不要になるわけではない。データの伝え方にコーチのスキルが関わるのではないだろうか。

2) 社会から見てスポーツを変化させる

- ① 暴力の問題 コーチの役割が重要
 - 男子は暴力、女子は暴言の問題が大きい
 - 怪我の要因としての指導者の暴言と練習量
- ② 電気信号でモチベーションを制御可能（ブレインドーピング）、うつ病治療に応用できる、倫理の問題あり
- ③ eスポーツ eスポーツは競技性を有し、競技者に反射神経、俊敏性、判断力等が求められ、世界的にスポーツの一環として扱われている
 - 依存症は病気であり対策が必要、特に小中学生の過度なゲーム使用により、不登校や学業不振増加が社会問題化
 - 他の依存症に比べて使用記録を捕捉しやすいため、対策が可能

3) スポーツから見て社会を変化させる

- ① スポーツによって豊かになる人生
- ② 幼少期のスポーツがその後の生活に与える影響大

- ③ アスリート向け画像・動画配信は子どもや一般市民へのスポーツ指導等、多様な活用が可能
- ④ 筋力、瞬発力、敏捷性、柔軟性は、幼少～青年期のスポーツ経験が高齢期に至るまで維持される傾向
- ⑤ 運動習慣は口腔状態をよくし、歯周病予防に効果あり
- ⑥ アスリート本人が自覚できない潜在脳（無自覚脳）により、主観（イメージ）と客観（身体の動き）には剥離がある、これは人によって異なり、一流選手は無意識のうちに対応できている
- ⑦ 科学的エビデンスに基づく分析から、自分の動きを知ることで上達ができる、高齢になっても上達の可能性あり
- ⑧ Sports analytics(SA) 2.0 では生体情報の非侵襲計測・解析に基づく選手の目下の状態、原因、直近の予測を行うことを目指している

4. スケジュール

2019年1月ー3月	現状把握と課題の抽出
2019年4月ー9月	抽出された課題のデータ収集と分析
2019年10月3日	学術フォーラム（エビデンスに基づくスポーツの価値）で議論
2019年10月ー2020年3月	回答内容の審議、提言案と回答案作成
2020年2月頃8日	公開シンポジウム（暴力）で議論
2020年3月初め	提言案を査読に提出
2020年4月ー6月	学術フォーラムで回答の手交と公開

参考）審議依頼内容

- ・日常生活におけるスポーツと社会との関係に関する科学的知見の整理
- ・スポーツ界と科学との関係の在り方の検討
- ・科学技術の進展、情報技術環境の変化に伴うスポーツの価値の変化に関する科学的知見の整理
- ・EBPM（Evidence-Based Policy Making）を推進していくための体制整備（スポーツ庁と関係学会との連携の在り方を含む）に関する提案